

研究結果報告書

台湾における対日感情とエスニック政治：「追認」された台湾民謡と台湾演歌を視点に

所属： 中央研究院 台湾史研究所
役職： 研究員
氏名： 陳 培豊

本研究は、演歌風味をもつ台湾語流行歌の生成と意義を検討した。戦前の台湾語流行歌は、植民地近代化の産物である。これら楽曲は主に半封建的な農業社会のもとで、台湾人の生活に対する苦悶や閉塞感を描写している。日本政府は台湾統治の過程で、主に農業を通じて収益を得ていたために、積極的に工業化を拡大する必要はなかった。台湾語流行歌は、すでに工業化した日本のように、流浪、漂泊、離郷、アウトローなどを題材とすることがなく、また歌唱法上では台湾伝統の俗謡の要素を保っていた。このため、台湾と日本の流行歌はあまり交わることがなかった。

戦後台湾は独立することもなく、祖国に「復帰」した。1960年代、中国国民党の統治の下で、台湾は工業化社会に突入し、多くの農民が都市へ異動して就職した。これに伴い、台湾語流行歌曲は大量に日本の「望郷演歌」等の作品をカバーし、歌う際にはアウトローの悲哀、あるいは弱者の自力救済という怨念を強化した。しかし、この戦前の台湾語流行歌は、新たに新しい「台湾民謡」を作り上げた。歌手は歌う際には、日本のゆり／こぶしを組み込み、弱者の怨念など演歌の精神を固定化、常態化、伝統化し、「台湾演歌」のプロトタイプを作り上げた。民謡は典型的な「創造された伝統」であり、人々の過去をいとおしむ態度を代表するものである。

戦後台湾語流行歌の日本化、あるいは新「台湾民謡」の出現は、台湾人の新たな文化的アイデンティティの形成と、日本統治時代に対する再評価を意味する。それと同時に、戦後台湾の工業化が、一種の複合的、連続的、そして複雑な社会変動であったことを示している。1947年に発生した二二八事件、百万にも及ぶ中国大陸からの人々の移住、戒厳令の実施、農村における土地政策、エスニックグループを社会資源の分配要素とする政策など、複数の要素によって工業化進入前の台湾人は、国家権力の中で被差別化、あるいは周縁化される存在となった。これに加えて、工業化の過程で多くの台湾人が離農して都市へ移住したにもかかわらず、政府はそれに当たって妥当な計画や措置を講じることなく、これら農民は都市の中で孤立し、あるいは職探しで挫折、零落した。

戦後台湾語流行歌には、国から捨てられ、自立救済以外に道がないという ある種の集団的な焦りやルサンチマンが含まれている。こうした特徴は戦前にはほとんどなく、戦後になって出現する。つまりこれは明確に工業化と 関連しており、国民党統治下台湾社会に残された傷痕を描き出している。

三次にわたる日本出張を以下の期間に実施した。 2018/12/09～ 12/13、 2019/02/10～ 02/14、 2019/10/06 ～ 10/10 出張期間は、資料調査のほか、日本人研究者との討議を通じて、戦前台湾、日本、朝鮮の流行歌の主要な差異が、工業化による人口移動という集団的な経験の有無に関連することを発見した。この経験は三者に共通するが、台湾では戦後になって流行する。そしてこれは、台湾語流行歌が日本化する主要な要因となったのである。

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)